

青銅武器からみた東周代長江中下流域の地域社会の 生成と展開

李, 寧

<https://hdl.handle.net/2324/7182267>

出版情報 : Kyushu University, 2023, 博士 (文学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏 名	李 寧			
論 文 名	青銅武器からみた東周代長江中下流域の地域社会の生成と展開			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	宮本 一夫
	副 査	九州大学	教授	森平 雅彦
	副 査	九州大学	准教授	辻田 淳一郎
	副 査	九州大学	准教授	荒木 和憲

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

上記の論文では、東周代の長江中下流域（楚・呉越）という地域的な青銅器文化において、各種青銅武器の変遷過程を、中原の青銅武器と比較しながら、東周代の斉一性と地域的な特殊性を明らかにしたものである。ここでは、青銅武器の体系的で詳細な編年を明らかにしただけではなく、戦闘方法の復元を行いながら、地域社会の社会進化の過程とともに、楚や呉越の諸侯国の歴史的解釈に至っている。その歴史的解釈は、これまで当該期の長江中下流域が殷周社会の周辺域として位置づけられてきたものに対して、独自の青銅武器の生成を示す地域社会であることを明らかにしたことが、秀逸な点として評価できる。また、そうした青銅器武器の内容から、楚が湘江流域の首長を媒介とした間接支配を行う春秋後期から、直接支配する戦国前期への変化を示した。さらに呉越を支配下に置く領域支配の動きを青銅武器の変遷から示し、東周代の長江中下流域の歴史的解釈を行っている。

第1章は、東周代の青銅武器の研究史を眺めるとともに、長江中下流域の青銅武器である剣・戈戟・矛・鏃の研究史をまとめる。このような研究史に基づき、各種青銅武器を型式学的な分析から編年と系統性を明らかにし、各地域の戦闘法を復元しながら、地域間関係およびその歴史的背景を解明することを目的とした。

第2章では、東周代の青銅武器の変遷を明らかにするため、中原地区における青銅剣・戈戟・矛・鏃の編年を示した。さらに第3章から第6章では、長江中下流域の青銅剣、青銅戈戟、青銅矛、青銅鏃の型式分類と編年を示し、地域的な特色を示した。

第7章では、長江中下流域の各種青銅武器の変遷をまとめ、3期4段階に区分した。その上で、各段階の分布に基づき地域間関係を明らかにし、出土状況と武器組成から戦闘法の復元を行った。その結果、春秋前・中期（第I期）では、各諸侯国により独自の青銅器が生産され、青銅武器においても、楚（漢水流域）・呉越（長江下流域）・湘江流域という三つの地域区分が認められた。春秋後期（第II期第1段階）には、地域間における戦闘が活発化し、楚による地域社会の統合が開始された。ここでは、湘江地域の楚による間接支配が認められた。さらに戦国前期（第II期第2段階）には、楚の領域支配が拡大し、湘江地域では楚の直接支配が始まるとともに、呉越まで楚の領域が拡大していく。戦国中後期（第III期）には、戦闘の拡大とともに、楚独特の郡県制の成立を以て、長江中下流域を統合した領域国家が成立したと考えた。

結語では、東周代の長江中下流域が多様な地域的伝統を持ちつつも、中原的な要素を受容し、楚という独特の伝統・政体を形成したことを青銅武器から示した。そして、楚の領域支配が、中原とは異なる支配体制によってなされていた可能性を示した。

このように、東周代の長江中下流域の各種青銅武器の詳細な型式分類と型式学的な編年を基に、本地域の地域間関係を示すとともに、楚による領域支配の過程を、青銅器武器という戦闘道具から歴史的な叙述を試みた体系的な論攷であるところに、本博士論文の意義がある。

以上から、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると認めるものである。